

# ミステリ読書案内

2023. 7. 17 発行元

第498号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

## 田中啓文「誰が千姫を殺したか」

ハヤカワの時代ミステリ文庫から出た『信長島の惨劇』が面白かったので本書も早速買ってみた。5月に講談社文庫から出た本。今度は大阪冬の陣・夏の陣に関わる豊臣家滅亡をテーマにした作品である。

### 田中啓文と時代ミステリ

私の棲んでいる市の一番大きな図書館では一般文芸書と時代小説を分けて別の棚に並べている。田中啓文は両方のコーナーに本が置かれている作家で、『鍋奉行犯科帳』シリーズは時代物コーナーに、『ハナシがちがう！笑酔亭梅寿謎解晰』シリーズは現代物コーナーに…、という具合。

テーマの幅の広さに驚かされる作家。最初の頃はSFも書いていたので、現在、過去、未来とあらゆる時間を越えての作品が並ぶことになる。

### 副題は「蛇身探偵・豊臣秀頼」

「千姫」「豊臣秀頼」まあ、常識のようなものだが、歴史に強くない人にとっては時代背景を理解するのに少し時間がかかるかもしれない。私はどの時代もある程度の基礎知識は出来上がっているの、その点で苦労することはない。

関ヶ原が終わり、江戸幕府が始まり、家康の晩年の時期。大阪城には淀君と秀頼が暮らしている。家康がいよいよ豊臣家を滅ぼそうとする動いたのが大阪冬の陣と夏の陣。本書は、そこから一気に話が型破りの方向へと展開していく。

### 「千姫」の動きとその後

千姫は大阪城が落城する前に抜け出て徳川方に保護されるのが歴史上の出来事なのだが、本書ではその前に…。その時のごたごたの中で生じた「謎」を45年後に秘密裏に生き残った秀頼が…。ところがその秀頼はというと…。

千姫は豊臣家滅亡の後、姫路の

本多家に嫁いだ、本多忠刻が亡くなった後は江戸城に戻り、天寿院として家光以降の将軍の後ろ盾となっていく。その辺も本書の中では重要な要素として登場してくる。

題名に結び付く「誰が殺したか」は、大阪城落城時点を示しているとも言えるし、結末部分を示しているとも言える。単純には密室殺人のトリックをもって「本格ミステリ」と名付けているところもあるが…。

### 忍者・真田十勇士

この時代のストーリーに厚みを持たせてくれるのは「忍び」の存在である。本書の中では真田十勇士の名前は全部登場するし、猿飛佐助は重要な役割を果たすことになっている。忍びではないが、真田幸村の子・大助も大活躍。対する位置にいるのが柳生宗矩などの柳生一族。いろいろな物語に取り上げられている懐かしい名前が次々登場してくるのが楽しみどころ。今の若い人たちにとって真田十勇士はどんな受け止めなのだろうか。

その意味で言うと、現在ブームの「時代小説」も20年後30年後にはどうなっていくのだろうか、とも思う。今の「時代小説」の読み手の多くは私ぐらいの年齢層だと考えられる。鎌倉時代、戦国時代、江戸時代などのテーマはだんだん廃れて、明治・大正・昭和の物語が「時代小説」の中心になっていくのかもしれない…。どうだろうか…。

東日本大震災や新型コロナウイルス、ロシアによるウクライナ侵襲なども「時代小説」になる時がやってくるのだろうか。是非、後世の人達がそこに学ぶべきことがあってほしいと願う。

### 平岡陽明「眠る邪馬台国 夢見る探偵高宮アスカ」

3月に中央公論新社から出た本。作者の平岡陽明はミステリ系の作家ではなく、本書も「ミステリ」を意識して書いたものではないかもしれない。題名の「邪馬台国」に魅かれて手に取った本。「邪馬台国」を題材にしたミステリ作品はたくさんある。本書も、学問的な研究の手法ではなく、着想のひらめきを土台としたアプローチである。

新聞社の文化部に勤める高宮周二が甥でアメリカの大学で「夢」の研究をしている高宮アスカに「邪馬台国論争」を講義するという形の作りになっている。アスカは母親がアイルランド系で、大半をアメリカで過ごしてきたので、日本の邪馬台国の話は知らないまま過ごしてきたという。ということで、一番の基本となる『魏志倭人伝』の講義からスタート。現在九割五分の人が「畿内説」になっていると書いてあるのはどうかな？と思いつつも、各解説は比較的オーソドックスなもの。いずれさまざまな読み取りが可能で、いかようにでも解釈がつけられる流れであり、決定的な決め手というものはない。ここから先は「夢」の話とか、アスカと一緒に暮らしている女性との関係とか別の要素が入り込んできて本筋から外れた展開になるので、最後の方に出てくる方向性もぼんやりしたものになってしまう。私自身は「邪馬台国論争」の今後について、『魏志倭人伝』から離れた科学的な分析手法からの解明を期待している。文の分析には限界があるということ。